

第7章 付編

第1節 聞き取り記録「立馬における狩猟経験」

日時 平成16年9月14日（火）

話者 小出庫雄(長野原町) 聞き手・編集記録 飯森康広

獲物 クマ・イノシシ

狩猟期 12月過ぎ（脂がのっていないと、皮をなめしても毛が抜けてしまう）

獲物の居場所 クマは絶壁の縁。蚊の少ないところ。逃げやすいところ。

イノシシは王城山では雪でしなったツツジの根元などに寝ころんでいる。

獲物の行動 明るいところが嫌いで、木立ちの中を行き来している。斜面は斜めに降りることが通例で、追い込まれない限り尾根を真っ直ぐに駆け下りたりはしない。

エサ クリ、ナガイモ、ヘビ、サワガニ、ウサギの子など

狩猟の段取り

「見切り」・・・下見のこと。下見によって獲物の動きをつかむ。足跡を見て、どこから獲物が来て、どこへ向かったかをつかみ、出かけた先から戻っていないことを確認する。獲物は巣に向かって追い込む。もし逆に追うと予測もつかないところへ逃げられてしまう。「たつま」・・・獲物を撃つ場所。撃つ人を指す。年寄りには「たつめ」ともいう。立馬では斜面の南北に40m間隔で撃ち手を立たせた（5人くらい）。銃は横には撃てないので、前しか撃てない。木を背にして待つ。木の陰にいと、左右で死角ができてしまう。「たつま」では気づかれないように待つため、タバコも吸えない。5時間も待つことがある。

「せこ」・・・追い込む人。むつかしい役目。足跡を確認しながら獲物を追い込む。獲物が来ていることを確認して、追い込みを始めることを「ふんざり」といい、「たつま」に無線連絡して開始する。追い込むルートをはずれているものは、最初にルートへ追い込んでいく。追い込みは声を使い、銃は使わない。獲物をあわてさせると、「たつま」に獲物が突進してしまい失敗する。獲物は「せこ」の50mくらい先を歩かせる。獲物は後ろを振り返りながら追われていき、前方に対する注意がそがれる。途中別ルートを採りそうな場所には「せこ」が先回りしておく。または、ひょっとして逃げていきそうな場所に1人撃ち手を置くこともある。そこを「すてだつめ」という。

立馬の実際

獲物は川原畑方面から来る。「見切り」をして獲物を確認したら、「から笠松」の南回り（①）から追い込みを始める。獲物はやや緩やかな斜面を東に追われる（②）。南側は日当たりの良い林集落なので南には逃げない。北側も斜面がきついので通例は逃げ込まない。立馬の東側は崖なので自然、「たつま」（③）に追い込まれる。

参考

ワナによる狩猟

エサ場への降り口辺りに仕掛ける。2・3日は石や丸太などの障害物を通路に置いて超えさせておき、慣れたところで障害物を超えた位置にワナを仕掛ける。用心深いのでなかなか引っかからない。ワイヤーの臭いなどで気づかれてしまう。立馬の陥し穴もただ掘ってあるだけでは捕れないのではない。柵などを使ったのかもしれない。

